

「総合表現」の授業づくりに関する研究

－ 壁面作品の制作を通して －

都丸洋一

Research on how to teach "comprehensive expression"

－ Through the expression of wall works －

Yoichi TOMARU

Abstract

This research devises a teaching method in order to improve the quality of the "comprehensive expression" class. This class aims to create wall works and increase the understanding and artistic expression of the environmental composition required by teachers of early childhood education. To that end, I devised a teaching method from five perspectives. Then I analyzed how the students learned the basic expressiveness in wall works.

Keywords: teaching method, wall expression, childcare environment, composition of environment

はじめに

本学では、これまで長く実施してきた総合表現Ⅰと総合表現Ⅱの科目の見直しを行った。その結果、2021年度より担当教員の特色を活かして12コースの授業を開設して選択できるようにし、それぞれのコースで前期と後期に渡って計30回の授業を行うようにした。

そこで、筆者が担当するコースにおいて、より質の高い授業が提供できるよう、授業内容に対して課題意識を明確にし、授業づくりを充実していきたいと考えた。

筆者が担当する授業の内容は、保育者を目指す受講者に壁面装飾（以下、壁面表現また壁面作品とする）¹⁾における確かな表現力を身につけることを目指すものである。この授業内容を設定するにあたっては、保育者に求められる表現力を身につけさせたいという指導者としての強い思いがあった。それは、保育の現場に目を向けると壁面表現の現状として、市販の保育雑誌に大きく依存していたり、あるいは壁面表現の重要性を深く認識せずに惰性で行っていたりといった状況が見られるからである。²⁾

これに対して、保育者が環境の構成の視点を明確にして壁面表現と向かい合うなら、保育のねらいや期のねらい、さらには保育の現状や実態に沿って表現を工夫しようとする意識が高まり、壁面作品は大きな保育の成果を担うことができるようになるであろうと考えた。

しかし、保育者がそうした表現をするためには、環境の構成に対する考え方とともに基礎的な美術的表現力が育成されているかどうかということも課題となる。つまり、環境の構成の視点から意図を明確にして壁面を表現するには、そこに美術表現の基礎的知識や美的感覚さらには基礎的表現力が育成されていなければならないと考えられるからである。

そこで、筆者が担当する授業では、保育環境としての壁面をどのように構成したらよいかという課題意識のもとに、保育者が行う環境の構成の視点から壁面作品に取り組み、製作を「制作」³⁾へと進展させて美術的な表現力を身につけることができるよう、その授業づくりを追究することにした。

1. 研究目的

かが重要であり制作時間に影響する。完成の見通しがもてれば、一気に完成に突き進むことも可能である。そのため、前段階として小作品を制作することは、発想・構想に時間が取られることを予想しての対応であり、また発想・構想に十分時間をかけさせたいという意図もそこにある。さらに小作品で試作することによって、課題が捉えやすくなることがあげられる。このステップを踏むことによる課題の発見こそが、表現技術や表現効果、美的感覚などの向上につながると考えている。後期の総合表現Ⅱが終了した時には、保育者に求められるより実践力として、壁面作品を制作するための表現力が高まっているようにしたい。

したがって、小作品の制作から大作品の制作へとステップを踏ませることは、環境の構成に関する理解力、壁面作品を制作する表現力(発想・構想を内包する)、美的感覚、そして保育者としての実践力につながる確かな力を身に付けるために有効であると考え、授業の全体像を構想する中心に据えた。

2) 前期の授業実践

壁面作品における基礎的な表現力を身に付けるために、図1「総合表現の授業構造と方策の投入」で示したように、5点の方策(a~e)に着目して前期の総合表現Ⅰの授業に投入した。この場合、基礎的表現力とは、多様に考えられるが保育者が行う表現活動であること、環境の構成としての壁面表現であることを踏まえて、①環境の構成に関する理解、②表現したいイメージを明確化する力、③表現したいイメージを構想する力、④表現方法を工夫する力、⑤美的な感覚、と押さえた。

したがって、先の5点の方策は、基礎的表現力としてのそれぞれの力を身に付けるための代表的な方策である。つまり、実際にはこの他に多様な事象が授業の中で影響を与えるであろうことも踏まえたうえでの方策である。

①環境の構成に関する理解

環境の構成について、基礎的な理解を身に付けるために幼稚園教育要領(解説)⁴⁾をその拠り所として使用し、保育における環境の構成の重要性やその果たす役割、意義について理解を深めた。

具体的な箇所としては、幼稚園教育の基本として書かれている「幼稚園教育は、～環境を通して行う

ものであることを基本とする。」⁵⁾や「教師は、～計画的に環境を構成しなければならない。」⁶⁾といった点を押さえたうえで、解説の関連箇所に着目して具体的なイメージが持てるようにした。

解説の関連箇所として取り上げたところは、「したがって、環境を通して行う教育は、～環境の中に教育的価値を含ませながら幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境にふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育である。」⁷⁾といった点に重点をおいて、幼稚園教育における環境の構成の重要性や役割についての理解を深めた。また、「1環境の構成の意味」⁸⁾を読み込み、「幼稚園教育が意図的な教育である以上、～教師として願いを環境の中に盛り込んでいかなければならない。」⁹⁾という点を大事にして指導した。

このような理解のうえに立って、環境の構成のひとつとして壁面作品に視点を当て、保育者としてその表現に教育的な意図を盛り込んでいくことの重要性を再確認した。そして、その意図は、幼児に今日のような体験が必要なのだろうか、そのためにどうしたらよいかを考え、創造的に教育環境を構成することが重要であることを強調した。

そこには、惰性で壁面を装飾したり義務感で壁面を製作したりしがちな現状を打開して、保育者として教育的価値観を自覚し、創造的な表現を目指してほしいという指導者としての願いがあり、既存の壁面作品なども提示しながらこの点を明確にして授業を展開した。

②表現したいイメージの明確化

環境の構成についての理解を深めたうえで、受講学生に壁面作品にどのような教育的な意図を盛り込みたいかを考えさせた。学生であるため幼児を前にしての意図ではないが、教育実習などの経験や①で育成した壁面作品に対する課題意識をもとに、保育現場を予想して意図を明確にもたせるようにした。

その意図は表現追究の課題として位置づけ、受講学生はその課題意識をもとに研究テーマとしてそれぞれが次のように設定した。

・学生A：春の明るく楽しい季節感を幼児に感じ取らせたい。(季節への関心を呼び起こす壁面制作の研究—あたたかな春を感じさせる表現の工夫をめざして—)

・学生B：幼児が海に関心を持ち、夏が来るのを楽しみに感じられるようにしたい。(季節への関心を呼び起こす壁面制作の研究—きれいな夏を感じさ

せる表現の工夫をめざして—)

・学生C：幼児が雪遊びから冬の季節を感じ取り冬への期待を呼び起こしたい。(季節への関心を呼び起こす壁面制作の研究—冬の楽しさを感じさせる表現の工夫をめざして—)

・学生D：幼児のクリスマスの行事への興味・関心を呼び起こしたい。(幼児の興味を喚起する壁面作品の研究—クリスマスの行事の表現を通して—)

・学生E：幼児が夏の時期に七夕の行事に関心をもてるようにしたい。(夏の行事への興味を呼び起こす壁面制作の研究—物語を感じさせる表現の工夫について—)

・学生F：みんなで取り組む園行事に関心を持ち、幼児の運動会への関心を高めたい。(行事への関心を高める壁面構成の研究—集団活動の楽しさを感じさせる表現の工夫を通して—)

このような課題意識を基に、壁面作品のイメージを明確化するためにアイデアスケッチを行った。ここでは、A4サイズのスケッチブックをスケッチ帳として配布して自由にイメージを膨らませて視覚化できるように場を設定した。

また、主な支援として「美の秩序」について指導し、アイデアスケッチに生かせるようにした。イメージを明確化しながら美的に構成するために表現効果を意識しながら進められるようにした。

＜主な美の秩序＞

- ①バランス ②コントラスト
- ③アクセント ④ハーモニー
- ⑤リピテーション ⑥グラデーション

これらは美的な構成のために欠かせない要素であるという考えのもとで提示した。

③イメージを具体的に構想する力

制作活動においては、計画的な制作や効率的な制作のために構想する力が必要とされる。

この授業においては、幼児に対する教育的意図を内包して壁面作品を制作する過程で、アイデアスケッチを基にして壁面作品(小作品)として完成に向けて計画的に進められるようにする必要がある。

そのため、漠然としたアイデアスケッチをより具体的にイメージできるよう具体化していく必要がある。そのためには、どのように表現するかといった表現方法、何を表現材料として使用するか、そのためにどのような用具を使用するかといった表現活動の詰めが大事になってくる。表現を進めながら考えるということも当然大切であるが、そこに甘えて詰

めが甘くなり、その結果右往左往とした表現活動となって多くの時間を費やすという結果がその先に見えている。そのため、表現活動の授業においては、時間が限られていること、表現活動の基礎を身に付けることをねらいとしていることから構想は特に大事である。

そこで、1人に1冊配布したアイデアスケッチ帳を有効に活用することにした。発想を視覚化するアイデアスケッチからさらに明確化するためのスケッチまで幅広く活用してページを惜しみなく使用するよう指示した。そこには、使用する材料、用具、表現方法など、全てのことを書き込むよう促した。

また、表現方法を具体的に考えて豊かな表現へと広げていけるように、基本的な表現技法を提示して支援を行った。具体的に提示した技法は、次のようなものである。

＜主な表現技法＞

- ①コラージュ ②スタンプング
- ③パチック ④フロッタージュ
- ⑤スパッタリング ⑥マーブリング

このような過程を経て視覚化されたアイデアスケッチをより明確化したうえで、計画表づくりへと進めた。そして、小作品の完成までを見通して表現活動の時間を配分し、時間的な把握ができるようにしたいと考えた。そのため、15時間分の計画が記入できる用紙(制作記録表)を配布して、受講学生が自分の表現方法や内容に応じて自分のペースで完成を見通して進められるようにした。

④表現方法を工夫する力

構想を明確にすることによって、かなり表現活動は進めやすくなる。しかし、よりよい表現を目指すためには、常に表現を工夫しようとする意欲的な意識が必要である。特にどう表現するかといった表現方法は、多様に考えることができるものである。そして、それは表現効果との関係で決まっていく。

例えば、ある学生(B)は、表現方法としてマーブリングの技法を生かすことが構想の中にあった。海の波の表現をマーブリングによるしま模様で生かそうと考えたのだ。しかし、マーブリングの美しいしま模様の表現に挑戦しながら、幼児のための表現であることを再認識した。そして、幼児に波の表現を感じ取らせるには、グラデーションの技法を用いて色の段階的な変化で波を表現する方が、形や色が整理され単純化されるので幼児にとっては、親しみやすさが生まれるのではないかと考えるようになって

た。そして、当初の構想が、鑑賞対象者が幼児であることから表現効果を考えて変更したのである。

こうした構想の見直しによって、よりよい表現へと工夫しながら表現力は高められていった。

したがって、この表現構想の見直しをいかに生じさせるかが、重要になってくる。授業の中では、見直しを起こさせる方策として「言葉かけ」や作品の「検討会」の場を状況に応じて行うようにした。

「言葉かけ」においては、先の事例でも示されていたように、この表現活動は保育における環境の構成を意図していることを意識させるよう投げかけを行った。また、表現のモチーフをどう構成するか効果的な構成の視点からも見直しの意識が生じるよう言葉かけを行った。

また「作品鑑賞」においては、「検討会」の名称で互いに作品を観合い、意見を交流し合う場を意図的に設けるようにした。しかし、期待したほどの活発な意見交流とはならなかった。「ここはこうだから、こうした方がよいのではないか」といった改善策を示すような意見は出てこなかった。表面的な見方に留まり、相手を思いやった無難な意見がほとんどであった。

それでも、検討会の後の受講学生の表現を見てみると変化があった。例えば、「表現材料を工夫してよいと思う」という意見をもらった学生（F）は、構想した材料の範疇で満足せず、さらにいろいろな表現材料を工夫する姿が見られた。同じように構想の見直しが検討会の後に見られていた。このことから、あまり盛り上がりのない検討会ではあったが、受講学生自身の内面では、確実に見直しの契機となっていることがうかがえた。

⑤美的な感覚

表現活動において、表現技術とともに美的感覚は重要な存在である。感覚的なものであるため、その育成方法は難しいところがあるが、この授業の中で方策の主となるのは「作品鑑賞」である。授業の中で壁面作品の鑑賞として重点を置いたのは、次の2つの鑑賞である。

1 つは、保育現場で展示されている作品や保育雑誌などで紹介されている作品を対象とした「既存の壁面作品」の鑑賞である。2 つ目は、先で触れた検討会において他の受講学生の作品であり「表現過程の壁面作品」の鑑賞である。

「既存の壁面作品」は、制作活動の初期段階に位置付けて行った。それは、課題意識をもたせるため

である。鑑賞の仕方によっては、鑑賞した作品によって自由な表現が限定されかねない。そのため、自分ならどう表現するかという視点を大事にした。表現の見通しとして、課題意識をもたせるための鑑賞となるよう心掛けながら美的な感覚を働かせて鑑賞した。そして、その課題意識の下に、各受講学生が美的感覚と関連させてテーマを設定した。

「表現過程の壁面作品」の鑑賞では、「検討会」としては盛り上がらなかったことを先の④の所で触れた。しかし、受講学生の内面では構想を見直しさらに表現を工夫しようとする姿が見られたことも触れた。例えば、美的感覚という視点では、受講学生（A）は、作品鑑賞を通して受講学生（F）のスタンプングによる雲の表現効果に刺激された。そして、綿による雲の表現にスタンプングによる雲を入れて構成することによって、雲の質感の違いによる効果を表現しようとするようになった。また、互いに表現を進める中で、「ここを目立たせるにはどうしたらいいと思う」など、美的な感覚に基づいた会話をする姿が多くみられるようになった。

以上のように、15時間の授業の中で壁面表現の基礎的な力を身に付けるために、主に5つの視点から方策を投入して指導方法を追究した。

5. 結果と考察

先の研究の内容では、方策を投入した授業の様子を示したが、ここでは、この実践を振り返ってこの研究のねらいとする「保育者に求められる壁面作品における基礎的な表現力を身につける」に対してどうであったかを考察することにする。

1) 授業実践の結果としての完成作品

6人の受講学生の壁面作品は、総合表現Ⅰの授業に取り組んだ結果、次のような壁面作品として表現が完結した。

【学生A】



【学生B】



【学生C】



【学生D】



【学生E】



【学生F】



2) 身につけたい力の視点からの考察

この研究は、壁面作品における基礎的な表現力を身に付けるために、5つの視点から方策を投入した。そこで、それぞれの視点から考察してみたい。

①環境の構成に関する理解

ここでは、環境の構成に関する理解を深めるために『幼稚園教育要領解説』をその拠り所とした。そして、環境の構成の重要性や壁面作品に教育的な意図を盛り込んでいくことの重要性を再確認した。さらに、保育者は教育環境を創造的に構成することが大切であることを強調した。

これを受けて、教育的な意図については、小作品の制作にあたってテーマを設定させたことによって、受講学生は常に意図を意識しながら取り組んでいた。表現において、その意図を意識することによって、表現方法に影響を与えるだけでなく、鑑賞の対象者を意識した表現につながっていく。そのことは、研究の内容の④で捉えたように、波の表現をマーブリングの技法からグラデーションによる表現に変更した例などからうかがうことができる。

このように環境の構成について理解を深めたことが、表現に影響を与えており、壁面作品としての表現効果を高めていることが見て取れる。

②表現したいイメージを明確化する力

ここでは、表現したいイメージを明確化できるようにするために、まず表現の意図を盛り込んでテーマを設定した。次にアイデアスケッチを十分に行えるようスケッチ帳を提供し、そして、さらに美的な表現につながるよう美の秩序としての構成要素を意識して構成できるよう指導した。主にこのような流れで展開した。

その実践を振り返ると、実際、指導者側が期待したほど豊かなアイデアスケッチとはならなかった。それでも、そのアイデアスケッチは構想段階に生かされ、イメージをより具体化して表現につなげるために表現材料や用具、技法などを書き込みながら、生かされていた。漠然としたテーマを視覚化し、それを具体化していくために、アイデアスケッチは欠かせないものとなっていた。そして、そのことは、イメージの明確化からイメージの具体化へとつながることができた受講学生の様子から、今後の表現への期待感が高まっていっていることが感じ取れた。

次に表現の意図を盛り込んでテーマを設定したことについては、特に有効であったといえる。それは、何のために表現するか、どんな感じの表現を目指す

か、鑑賞対象は誰なのかといった要点を常に意識しながら表現に向かうことができていたからである。また、表現の見直しや表現を工夫する際にも、各個人が設定したテーマを確認することによって原点を意識することができていた。

表現活動には自由さがあるため、それが場合によっては豊かな発想によって原点を忘れさせてしまうことがありがちである。しかも授業という限られた時間の中で幼児のための壁面表現という目的に向かっていくためには、常に原点を意識してぶれないようにする必要がある。その意味で、テーマの設定は、目指す方向を明確にしてイメージの視覚化に役立っていた。それは、構想の具体化や表現の工夫においても同様であった。

また、美の秩序について指導したことについては、この段階で行ったことによって、先述と同様に構想の具体化や表現の工夫に生かされていた。そのことは、授業の中で受講学生同士が交わす会話の内容から捉えることができた。

このようにイメージを明確化のために投入した方策を考察してみると、早い段階でのテーマの設定がその後の表現に有効に働いていたことが捉えられる。

③表現したいイメージを構想する力

構想する力は、無駄な時間を費やさず効率的に表現するために大事な役目を果たしている。この力を育成するために、ここでもアイデアの視覚化において使用したアイデアスケッチが継続して使用された。そして、そこには、指導者が提示した表現技法を参考にしながら表現の仕方や材料、用具など幅広く構想して具体的な表現活動に備えるようにした。ここにおいては、配布したアイデアスケッチ帳が有効に活用されていた。先述で触れたように豊かといえるほどのスケッチではなかったが、発想・構想・表現と展開していくうえで大事な役目を果たしていたことは確認できた。

次にこうした構想をもとに時間的な見通しがもてるように計画表づくりをした。しかし、受講学生の計画は漠然としていて、作業の流れを緻密に押さえるものとはならなかった。そのため、その後の表現活動は、計画的な取り組みという点では課題の残るものとなった。この点について受講学生を観察すると、大まかな見通しはアイデアスケッチによる構想で把握できているが、その詰めができない状況であった。

このことから、構想する力においては、時間的な見通しを持たせることは大切であるが、表現過程をより細かく時間的に把握させる方策においては課題が残った。

④表現方法を工夫する力

表現方法を工夫するとは、効果的な表現を目指すことであり、それは表現力を高めることにつながる。したがって、この研究のねらいに結びつく大事な視点である。

ここでは、意見交流を通して表現の見直しの契機となるよう機会をとらえて作品の「検討会」や受講学生への「言葉かけ」に重点を置いて行った。

「言葉かけ」においては、幼児のための環境の構成という視点を投げかけることによって、先に事例で示したように、幼児を意識した表現になるよう見直して表現方法を工夫する様子が確認できた。ここにおいては、指導者が言うから表現を変更するのではなく、受講学生自身の気づきで表現の工夫が生まれるよう言葉の投げ方に注意を払った。受講者の表現力の実態を踏まえ、受講者自身が工夫を生み出せるようにした。¹⁰ この点は、造形表現の授業における自己表現のための原点であると考えている。

また途中作品の「検討会」においては、期待したほど活発なものでなかったことを既に研究の内容のところで述べた。それは、表面的な意見であった。問題の指摘や改善の方向を述べる意見ではなかった。この点については、どう活発なものにしていくかという課題が残る。しかし、その後の表現活動の中で、より表現を工夫する姿が見られたことから、方策としての効果は確認できた。

したがって、表現方法を工夫する力においては、投入した方策によって一定の成果は認められたが、作品の検討会をいかに活発にしていくかによってさらに表現力を高めることにつなげていくことができると考える。

⑤美的な感覚

美的感覚を育成するのは、感覚的なことであるため難しさがある。しかし、美術的な用語を手掛かりにして鑑賞することによって、他とのコミュニケーションが取りやすくなり意見交流を通して感覚を高めていけると考えた。そして、「作品鑑賞」の場を主たる方策として投入し、「既存の壁面作品」の鑑賞と受講学生の「表現過程の壁面作品」の鑑賞に重点を置いて行った。

「既存の作品」の鑑賞では、今後の表現の見直し

をもたせることをねらいとし、どんな感じに表現したいかという感覚を大事にして、テーマ設定につながるようにした。鑑賞作品から、楽しい感じ、暖かい感じ、明るい感じなど美的感覚を働かせて感じ取ったことを分かりやすい言葉で表現して共有した。

そして、こうした感覚を表現につなげていくために、その後に提示した美の秩序が大きな役目を果たしていた。学生は、「この色とこの色のハーモニーによって暖かさが生まれている」、「ここのコントラストで明るさが引き立っている」といった捉え方が可能になっていったといえる。そして、そうした感覚を生かして、アイデアスケッチにつなげることができた。

また、「表現過程の壁面作品」の鑑賞は、「検討会」の中で行われた。活発といえるほどの意見交流ではなかったが、先で触れたように作品鑑賞を通して雲の表現をスタンプングの技法に変更するなど表現の見直しにつながった。そこには、綿で表現した雲と白い絵の具を使ってスタンプングで表現した雲との表現効果の違いがある。そして、そこには正に美的な感覚が働いていることがうかがえる。

このように事例に触れながら考察してきたが、美的な感覚においては、授業を通して着実に身につけていったといえる。それは、方策として投入した「作品鑑賞」において基礎的な美の捉え方に親しみ、それをもとに表現活動では表現力を支える力として機能し、表現の見直しへと発展していったといえる。

2) 明らかになった問題点に対する考察

(1) アイデアスケッチがあまり豊かに行えなかった点について

このことについては、受講学生の表現活動に対する経験の不足が考えられる。美術表現に関心があって進学してきた学生ではなく保育者になることを目指している学生である。音楽への関心に比べると美術への関心をもって取り組んできた学生は少数である。こうしたことを考えてみると、指導者側に受講学生に対する実態把握の甘さがあったといえる。

しかし、保育者にとって美術的表現力は大切なものであり、そのために豊かなアイデアスケッチは欠かせないものである。今後、何らかの方策を考えていく必要があるが、テーマ設定後にアイデアスケッチにつながる「材料・素材集め」の場を設定することによって、解決に迫れるのではないだろうか。

(2) 表現の計画が詳細に立てられない状況が観察できたことについて

この点については、先述のように表現活動における経験の不足ということも一つの原因として考えられる。つまり、漠然とした見通しであっても経験を重ねる中で時間的な把握ができるようになってくることも考えられる。

また、日常生活において思いつきや行き当たりで生活し、計画性をもって進める習慣やその必要性を意識する経験に乏しいことも考えられる。この点においては、保育者として職務遂行するようになった時のことを考えると、学生の時から計画性を培うことは今後に有効に働くといえる。特に、壁面作品が保育現場で敬遠される理由として、時間がかかることが考えられることから、壁面表現において身に付けたい大事な力といえる。

そのため今後の課題として取り組んでいく必要があるが、現時点では「総合表現Ⅱ」の授業において、より緻密な計画を立てられる計画表の様式を改善することで問題解決に迫っていきたい。

(3) 作品の「検討会」が期待したほど活発な意見交流ではなかった点について

15回の授業の中で機会をとらえて2回ほど途中作品の検討会を行ったが、活発なものとはならなかった。この点については、相手を思いやる気持ちからというのが最も的をついていると思われる。そして、そうなるのは、作品についての意見交換に慣れていないためと考える。

作品の意見交換に慣れ、互いによい表現を目指す者同士という意識がもてるようになることによって、自然と活発になっていくのではないかと考える。

この問題に対しては、「総合表現Ⅱ」においても「検討会」を継続し、よりよい表現を目指す意識を共有して解決を目指したい。

3) 「総合表現Ⅱ」に向けての課題の考察

「総合表現Ⅰ」の授業実践を通して、上記の問題点が抽出できた。これは、「総合表現Ⅱ」の授業を質の高いものにするために大きな成果といえる。

「総合表現Ⅱ」では、こうした問題点の克服を目指しながら、研究の目的としている「壁面作品における基礎的な表現力」が身に付けられるように指導を工夫していくことになる。

「総合表現Ⅰ」では壁面作品として小作品の完成を目指し、「総合表現Ⅱ」では大作品の完成を目指す。ここには、より確かな表現力の高まりを目指すという意図がある。小作品→大作品へとステップを踏むことによって、自己の表現を振り返って課題を

明確にすることができる。それによって、表現力を確実に高めていけると考えている。

したがって、壁面作品を作ること自体が主たる目的ではなく、壁面作品を制作する過程を通して自身の現状の表現力を確実に高めることを重視していくことになる。

完成した小作品に対して、各受講学生は次のような課題意識をもっている。

＜受講学生が捉えた改善案の一部＞

- ・A：春の花の表現が単調だったので、花の色や花の大きさに変化を出したい。
- ・B：海の水平線上に船を入れて、遠近感を出せるようにして画面のバランスを取りたい。
- ・C：雪だるまを大きくして画面がまとまるようにして、雪の表現をさらに工夫したい。
- ・D：クリスマスの飾りをさらに工夫して、幼児の関心を引きつけられるようにしたい。
- ・E：七夕の雰囲気が高まるように、天の川の表現や織姫・彦星がより目立つようにしたい。
- ・F：雲の表現効果を出すために、絵の具による表現でなく綿を用いて表現してみたい。

こうした課題が「～したい」と表現されているように大作品に向けての意欲が感じ取れる。しかし、改善の方向性を明確に示した課題と、単なる思いだけで改善策まで至っていない課題とがありそこには個人差が見て取れる。この点においては、今後「総合表現Ⅱ」の授業の中で、より具体的で効果的な改善策を自覚して取り組めるよう個別支援を充実していきたい。

また、上記の課題をその内容まで踏み込んで捉えてみると、各受講学生が自身の作品を造形的に捉えて改善しようとしていることが見て取れる。

例えば、画面上に表現されたパーツに対して色や構成といった視点から鑑賞していることや、別の学生では遠近感やバランスといった美術的な見方や造形的な感覚を働かせて課題を捉えようとしている。また別の学生は中心になるものを大きくしてまとまりのある画面構成にしようとしているといった点などが捉えられる。

これらは、美術的な見方や造形的な感覚を働かせて表現を追究しようとする姿勢であり、壁面作品を制作するうえで保育者に求められる課題としてあげた「基礎的な美術的表現力の育成」に対して、課題解決の方向性を感じさせる姿であるといえる。「総合表現Ⅱ」では、こうした成果を基盤として、さらに

基礎的な表現力を高めていくことになる。

6. 研究のまとめ

上記のように授業実践の結果を考察することができた。そこで、この考察を整理することによって、研究のまとめとして次のように成果や課題を捉えることができる。

1) 成果

- ① 保育における環境の構成についての理解を深めて壁面表現に取り組んだことにより、幼児が対象者であることを意識して表現を見直したり表現を工夫したりして表現を高めていた。
- ② 早い段階でテーマの設定をしたことによって、表現したいイメージを明確にしてアイデアスケッチやその後の表現につなげていくことができていた。
- ③ アイデアスケッチをもとに表現技法や表現材料、使用する用具など、幅広く構想して表現の見通しをもつことができていた。
- ④ 「言葉かけ」や「検討会」によって、表現を見直して効果的な表現を工夫していた。
- ⑤ 「作品鑑賞」などを通して、美の秩序などの視点から表現効果を捉えて美的感覚を高め、意見交流や壁面表現に生かしていた。

2) 課題

- ① アイデアスケッチにおいて、期待したほど豊かにスケッチが描けたわけではなかった。そのため、アイデアを豊かにして視覚化できるようにするために、その前段において資料集めに重点を置くことによって解決を目指す。
- ② 表現の計画が詳細に立てられない状況が観察できた。そのため、「総合表現Ⅱ」では、表現の見通しを時間的な把握のもとでより詳細に計画を立てられるように計画表の様式を改善して解決を目指す。
- ③ 「検討会」が期待したほど活発なものとならなかった。「総合表現Ⅱ」においても継続して発表に慣れさせ、共により良い表現を目指すという意識を共有させることで解決を目指す。

3) 今後の課題解決に向けて

このようにまとめをして全体像を振り返ったとき、この実践した授業づくりは、筆者のこれまでの教職経験¹¹⁾に照らしてみると義務教育段階の授業に近

いものであると感じた。またそのうえで表現活動の授業は、表現活動そのものではないことも強く認識した。そこにおいては、育てたい力・身に付けたい力がある。そのため指導方法は、より緻密でより計画的でなければならない。それは、授業対象者の発達段階が上がれば上がるほど、より強化していく必要があるものである、という考えを強めた。

こうした認識に立って今後、先述で整理し抽出した課題の解決を目指し、壁面作品の授業の充実をさらに進めていきたい。

おわりに

幼児は、環境を通して様々なことを学び成長していく。その環境の一環として、表現される壁面は保育者の思いが込められるものであってほしい。身近で幼児とかかわっている保育者であるからこそ、よりその実態や状況を反映した表現が可能である。見栄えよりも幼児の心に響く表現がそこに求められているといえる。

そして、その表現は、装飾という言葉では適切に伝えられないのではないだろうか。もっと保育者自身の感覚で内面の深い思いを自己表現し、創造的なものでなければならないと考える。保育者として、壁面表現に自信をもってほしい。保育者自身が表現を楽しんでほしい。

そんな思いが、この研究の根底にある。自己表現を楽しむ保育者を育てられたらという思いで、この「総合表現Ⅰ」の授業づくりに取り組んだ。

注・引用・参考文献

- 1) 保育者が、保育環境の視点から環境の構成を意図して壁面に展示する作品が一般的に「壁面装飾」という名称で呼ばれている。この点について、筆者は保育者が明確な意図をもって行う壁面の表現は、装飾という言葉ではあまりに表面的であり真意が伝わらないと考え、本文のように壁面表現などの表記を用いることにした。
- 2) 筆者は、これまで公立幼稚園の園長や私立幼稚園の副園長として幼稚園教育に携わってきた。そ

うした中で、壁面の表現が保育雑誌に依存していることを強く感じてきた。また、その表現の中に園や園児の身近な実態や状況が、反映されにくい現状があると感じている。

- 3) 一般的に保育においては「製作」という文字が用いられるが、保育者が明確な意図をもとに行う表現活動で、しかも創造的に表現を工夫している表現活動であれば、それは「制作」が適切であると考ええる。
- 4) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、平成30年3月
- 5) 前掲4)、288頁
- 6) 前掲4)、288頁
- 7) 前掲4)、30頁
- 8) 前掲4)、248頁
- 9) 前掲4)、249頁
- 10) 受講者の実態に応じた指導や受講者自身の表現を尊重することは、自己表現を目指す授業においては原点であると考ええる。したがって、例えば指導者が受講者の絵画作品などに躊躇せず筆を入れる指導に対して筆者は好ましいとは思えない。
- 11) 筆者は、公立の中学校で美術の授業を17年間担当した。授業対象者の年齢や経験年数、発達段階が異なっても授業においては、常に実態や状況に応じて支援していくことに何ら変わることはないという考えをより強くした。